



ロータリー:  
変化をもたらす

2017-2018 年度

国際ロータリー会長 / イアン H.S. ライズリー 会長 / 佐々木 哲也 副会長 / 小汀 泰之  
2690地区ガバナー / 池上 正 幹事 / 曾田 敏康 会計 / 高砂 明弘

■平田ロータリークラブ 事務局

〒691-0001 島根県出雲市平田町2280-1 平田商工会議所2F  
TEL: 0853-63-3232 / FAX: 63-5365 / IP: 050-5204-5816  
URL: <http://hirata-rotary.jp/> Mail: [office@hirata-rotary.jp](mailto:office@hirata-rotary.jp)

9:00 ~ 17:00 (土・日曜・祝祭日 休局)

■例会プログラム

例会日	卓話者	演題
3月22日	会員 岩浅 慎龍	新入会員スピーチ
3月29日	休会	
4月8日	出雲文化伝承館 8:00~	5RC合同植樹プロジェクト
4月12日	会員 大島 淳司	新入会員スピーチ

■出席報告

会員数	出席者数	欠席者数	出席率	前々回補正出席率
44	36	8 (4)	90.00%	— %

■欠席者

高砂 / 恒松 / 飯塚 / 園山 (山根 / 牧野 / 遠藤 / 大谷厚)

■来訪者

なし

■メイクアップ

なし

■次回例会受付当番

(4月8日) 松浦剛司 / 恒松克己 / 内田節夫

(4月12日) 遠藤 栄 / 福田磨寿穂

■近隣クラブ例会情報 (メイクアップを考えましょう)

月	出雲中央 4/9 4/23(-) 5/28(-) 6/18 6/25(-)	松江南 4/2 4/23
火	出雲 4/3 5/1(-) 6/26	松江しんじ湖 4/10 5/1
水	大社 4/4	松江 5/2 6/20 6/27
木	(-) ; ビジター受付 なし	松江東 3/22(-) 4/26(-) 6/21 6/28(-)
金	出雲南	

■会長挨拶

3月も下旬を迎え、卒業式のシーズンもほぼ終わりました。わがとこテレビでも地元での卒業式の模様が放映されましたし、春分の日で祝日であった昨日朝のワイドショーを見ていると、将棋の中学生プロ棋士藤井聡太六段の中学卒業や江津市にある石見智翠館高校での卒業式に歌手の絢香さんがサプライズ登場するという番組企画の模様などが話題にあがっていました。

私自身も小・中・高校・大学と卒業は4回ありましたが、そのうち高校の卒業式には出席できませんでした。理由は、第2志望大学の受験と重なったため、後日高校を訪ねて担任の先生から卒業証書を受け取りました。

31年前の島根医科大学の卒業式には出席していますが、卒業後の勤務先として母校の附属病院を選択しましたので、転居の必要がなく、学生として授業料を払う立場から職員として給与をもらう状況に変わった程度にとどまり、卒業したという印象は当時少なかったように思います。むしろ、受験を控えていた医師国家試験になんとしても合格しなければならぬ、不合格になると次の国家試験は1年後になってしまうという気持ちの方が大きい状況でした。今年の医師国家試験の合格者は3月19日に発表されましたが、当時は5月連休明けの発表というスケジュールでした。

卒業とはその時点での活動の区切りとなりますが、卒業の後には、何らかの次の新天地があります。今年卒業を迎えた多くの若い人たちがそれぞれの新天地で新たな目標を持って活躍されることを願いたいと思います。

■幹事報告

1. 会費の引落 4/5 54,000円 (4・5・6月分)
2. 例会変更  
○ 松江RC 6/20(水) 最終夜間例会  
ビジター受付 12:00~12:30 ホテル一畑
3. 休会  
○ 松江RC 5/2(水)・6/27(水) 定款による  
ビジター受付 12:00~12:30 ホテル一畑
4. 日本赤十字社島根県支部 支部長 溝口善兵衛様より感謝状を頂きました。
5. るんぴこい苑より「るんぴこい新聞82号」をいただきました。

■ガバナー事務局 パナー贈呈

新入会員さん3名へのガバナー事務所からのパナー贈呈



■理事会決定事項

2月に発生した台湾東部地震義援金として会員1人1000円を決定しました

■次年度幹事報告

次年度の委員会構成表配布

■委員会報告

情報・雑誌委員会 : 家庭集会の案内

■スマイル

佐々木 (日本赤十字社島根支部長溝口理事から、献血運動に対する表彰をいただきました。岩浅会員のスピーチ楽しみにしています。)

曾田 (岩浅会員、本日のスピーチ宜しくお願ひ致します。4月8日(日)5クラブ合同植樹プロジェクトの参加宜しくお願ひ致します。)

■スピーチ・例会行事

新入会員スピーチ 岩浅 慎龍 会員

1月に入会した新入会員の二人目として、本日スピーチさせていただきます。自己紹介を含めたこれまでの人生様子を「縁の有難さ」というテーマでお話させていただきます。

私は、昭和46年12月28日生まれの現在46歳でございます。3人兄弟の長男として大龍寺に生まれました。両親とともに教員として初任地川本におりましたので、私も3歳3ヶ月ほどは川本町で育ちました。その後、平田に戻り、東幼稚園、東小学校、旭丘中学校、平田高校へと進みます。

子どもの頃の私は、特に目立つ子ではなく、学校では、特に人と比べて秀でたこともなく、何となく人に足並みを揃えていたような気がします。

そんな中で、一つだけ人と決定的に違うことがありました。それは、生まれた家がお寺だったということです。このことが、私の性格や人生に良くも悪くも大きく影響をしていると思います。

小学校3年生の時まで健在だった祖父に小さい頃から「お経」を習い、子ども用の法衣を着て、お寺での行事や法事で檀家さんの前に出ることがあり

ました。葬儀のデビューは小学校1年生の時でした。小さい小僧さんに檀家の皆さんは、喜んでチャホヤもされますし、そういう優越感みたいな感覚が心地良かったです。しかし、それもだいたい小学校の中盤頃までで終わりを迎えます。高学年になると、人と自分を比べることに敏感になってきます。人の家と自分の家。人が遊んでいる時に自分はお寺のことをしないといけな。苦痛でしょうがありません。それでも小学生の間は親の言うことを聞いてやっておりました。それが中学生になるとだんだんとエスカレートしてきます。人と違うことをしなければならぬことに嫌気がさし、徹底的に反発するようになります。そして、親とほとんど会話をしない中学生・高校生時代を過ごしました。ちなみに、私は今自分のことを短気な性格、怒りっぽい性格だと理解していますが、それも学生時代の反抗心から来たのだらうと思っています。高校3年生になり、進路を決めなければならない時期がやってきました。その頃私が決めていたことは、お寺は継がない、親と同じ教員にはならない、家を出たい、ということでした。けれど、どうしていいかわからず、何となく「大学でも行こうかな」と先生に相談すると、「今の成績で行ける大学などどこにもない」と言われてしまいました。これに両親は、花園大学をすすめてきました。京都にある花園大学は、私のお寺の本山、妙心寺派が運営する臨済宗の宗門大学です。臨済宗のお寺の生まれだから、こころ何とかなるかもしれないと考えたようです。私は、お寺を継ぎたくないと思っていたので、どうしようか迷ったのですが、とりえず家を出られるのなら良いとして勉強し無事進学しました。さらに大学は5年生を経験するなど、いろいろありましたが、卒業後は京都嵐山の天龍寺の道場に入門しました。

修行生活はとても厳しいものでした。覚悟を決めて入ったとはいえ、やりたくないというのが本音でした。しかし、そこが私の人生で初めて訪れた大きな転機となりました。道場に入る人たちは、ほとんどがお寺で生まれた方、さらには花園大学出身の方もたくさんいました。けれど、道場での生活に最初からすばやく対応できる人はほとんどいません。それはどういふことかと言うと、私は、小さい頃から法衣を自分で着て、「お経」も暗記して読むことができました。和尚さんたちの中に入って法要の中でのいろいろな役割もこなしてきました。そこで私は初めて、人前で役に立つものを自分が持っていることを認識したのです。お寺のことをいくら知っていても、小学校や中学校で役には立ちません。そういう中で反発をしてみました。それが、道場に入ってやっと自分の持っているものが通用したのです。ここで初めて、自分がやってきた現実世界と自分自身がつながったのです。つながりということが「縁」です。祖父や父は、この時のために、どんなに息子が嫌な顔をしてでも縁をつなぐために幼少期にいろいろ教えてくれたのだと、後に気づき感謝したものです。あの時、絶対に修行は行かない、お寺は継がない、と選択することもできたはずですが、でも、それではせつなくやってきたことがつながらず、縁にならなかつたのです。

「縁」とは、よく人との縁のことを指すことが多いような気がします。しかし、それだけではなく、自分に訪れる現実や出来事をどう受け止めるか、それが縁だというふうに思います。ある出来事に対して良かったなあと感じられれば、それは最高の縁を結んだことになるでしょうし、大したことがなかった、やらなければ良かったであれば、それは縁ではなくて、同じ字で縁(ふち)にしてしまったということになるでしょう。

さて、天龍寺では5年間お世話になり、11年ぶりに平田に帰ってまいりました。29歳の私が初めて社会人になるその春は、まず不安だらけのスタートでした。大きな不安が二つ。2番目は、自分の地盤がなく、居場所が分からないということ。そして、1つ目の最大不安は、仏教のことを何も知らなかつたということ。臨済宗の修行道場は、行を重んじる所です。坐禅、托鉢、

肉体労働、読経などなど、とにかく朝から夜まで決められたプログラム通りに行を積んでいくのです。学問を学ぶ所ではないのです。

法事に行っても法話ができないわけです。いくら「お経」が読めても、坐禅が出来ても、手早く掃除が出来ても、それだけではダメなのです。そこで、3年後の平成16年、勉強のつもりで、妙心寺で2年に1回行われる布教講習会に参加することにしました。半月間泊り込みで行われる講習では、法話を5回発表、優秀者は妙心寺派公認の布教師になることができます。もちろん、自分になれるはずはないと思っていましたので、とにかく勉強しようと思ってきましたら、誰が何を間違えて評価したのか、上位得点で合格してしまったのです。合格したこと自体は素直に嬉しかったのですが、それからは妙心寺派という冠がつくことになるわけですから、それなりの苦勞もありプレッシャーでもあります。しかし、そのことによって、僧侶としての活動の幅は大きく広がりましたので、有難いと感じています。

そして、もう一つ、平田に自分の地盤がない、居場所がないと感じていた不安。それを意識していたわけではありませんが、結果的にその不安をなくしてくれたのが平田青年会議所への入会でした。良さを見つけあう場、仲間、お互いに磨きあったというきっかけがあり、最終的には理事長まで務めさせていただきました。

修行道場を出たあとの30代の大きな出来事二つをお話しましたが、一見別々のものが実はうまくつながりあっていたと思います。法話の勉強を含めて僧侶の仕事でやっていることがそのままJCで活かされる。逆に、JCでやっていることが僧侶としての仕事で活かされる。そんな場面がたくさんありました。

その代表的な場面が「ひらた100km徒歩の旅」でした。JCで5回開催した後、ちょうど卒業した40歳の年からOB主体の運営に変わり、私も松浦さんのもとで中心的に活動させていただきました。

私は、「100km徒歩の旅」の8回～10回目団長をしました。何も苦勞の多い荊の道へ入っていかなくても良かったのですが、そこに大きく影響したのが家族でした。平成14年の暮れに結婚。現在、子どもは、中2の長女、先日小学校を卒業した6年の長男、小4の二女、小2の二男がおります。JCはとにかく家を留守にするということで、うちの妻からも低評価だったのですが、「100km徒歩の旅」だけはやってほしいと強く熱望していました。わが子たちもちょうど「100km徒歩の旅」に参加できる年頃だったので、そういうつながり・縁によって続けてこられたように思います。

今、子どものことで時間をとられることが結構あります。仕事が忙しい時など、大変だ、めんどうなどと思うこともあります。しかし、職業である僧侶の時間、家庭の中での家事、子どものこと、あるいは社会活動など、皆すべて今、私がやるべきことであることに変わりありません。すべてが自分の為、すべき仕事だと思ってやる。そうすると、すべてつながりあい、そして物事うまく動いていくのだと思います。そういうつながり“縁”の中で私はとても有意義な人生を送れていると思っています。

最後に入会したからには、やって良かったなと思えるように、縁を結べるように頑張っていきたいと考えております。

